

「生きられる民俗」としての微小地名

関 礼 子 1)

はじめに一地域の品格

北海道えりも町字えりも岬は、襟裳岬の絶景を背景に暮らしを営む地域である¹⁾。そして、日常の暮らしのなかに、環境の時代が要請する「物語」の種を育ててきた地域である。

私が初めてえりも岬に調査に訪れたのは、1990年代初頭、ちょうど地球環境問題が大きくクローズアップされ、地球上から急速に失われる緑の森の危機が伝えられた時期だった。そうした時期に、えりも岬の漁師たちが携わった緑化事業の成功は、時代が要請する問題解決の方途を先取りしたものとして広く注目されるようになっていた。

そのとき既に、えりも岬では、獣害被害を引き起こす野生動物との共生が模索されていた。漁師たちの参加・協力のもとでゼニガタアザラシの個体数調査が行われ、被害という「痛み」をもたらすゼニガタアザラシとの共生の可能性が考えられていたのだ。

それは、「市民調査（住民調査）」という手法を用いながら、アダプティブに獣害問題に対処しようとしていたということではなかつたらうか。2008年度から始まった共同研究「アダプティブ・ガバナンスと市民調査に関する環境社会学的研究」²⁾を契機に、再びえりも岬の人びとが紡いでいる「物語」を考えたいと思った。「物語」を紡ぐ人びとに出会いたいと思った。2008年8月、私は立教大学社会学部現代文化学科の学生とともに、3泊4日でえりも町を訪れた。学生のひとり、金丸祥子は、はじめての滞在で感じた魅力を次のように記している。

「えりも町では、調査と共に広大な自然の素晴らしさを実感することができました。“えりも”で感じ

た魅力とは、

1) 襟裳岬の動植物

襟裳岬の望遠鏡では、たくさんの自然体のアザラシを見ることが出来ます。また、晴れた日に見る襟裳岬は美しかったです。さらに、えりも町では車の走行中にキツネ、エゾシカに出会うことが出来ます。エゾシカが、広大な芝生で優雅に草を食べている姿に目が釘付けになりました。また、夏の夜の蛍を見せていただきました。暗闇で光る蛍はとても神秘的で、忘れられない夜の思い出となりました。

2) チョウチョ貝

通称；ムイ（オオバンヒザラガイ）。“幸福を呼ぶ貝”と呼ばれているそうです。滞在して旅館の方から、頂いた貝なのですが、貝殻がチョウの形をしていて本当にかわいらしい貝です。浜辺を歩いていても見つけるのは難しいらしく、えりもの浜辺を歩いてこの貝を発見する楽しみもありそうです。

3) えりも町郷土資料館 ほろいずみ

資料館では、大きなコンブの展示がとても印象的でした。コンブ漁が盛んなえりも町らしいコンブ漁の歴史、コンブの展示を楽しめました。アザラシの模型も見ることができ、アザラシの生態についても知ることが出来ました。地域の子供たちに愛される資料館であり、また観光客にとってもえりも町を知ることができる資料館であると感じました。

4) えりもの“食”

旅館で頂いた食事はとてもおいしく、食事の時間が楽しみの一つでした。えりも町の食を通じ感じたのは「スローフード」。丁寧に作られた食材を

1) 立教大学社会学部 seki@rikkyo.ac.jp

ゆっくりと味わうことです。えりも岬で採れた昆布も、手間がかかっている食材と知り、味わい深かったです。旅館での食事は魚介類が中心で、ウニやイクラなども食材の味を生かして調理されていました。

短角牛は、えりもで飼育されている和牛の一種。滋味のある良質の赤身肉で、カロリーや脂肪量が少ないそうです。滞在中に「短角牛のこんぶ入りハンバーグ」をいただきました。

5) 最後に

えりも岬では、調査のために突然のアポイントメントにも関わらずに快く引き受けて下さった方々や、えりも岬の魅力を教えて下さった方々に感謝します。」

実は、ここで語られた魅力は、えりも町滞在中にお世話になった人の顔とともに想起された魅力でもある。えりも町の自然や歴史、食の魅力は、えりも町で出会った人を通して彼女が感じた魅力なのである。「物語」の種を育む地域には、地域にこだわりとプライドを持った魅力的な人びとがいた。そこに、地域の品格を垣間見たように思える。

そこで、この小論では、えりも岬の人びとが語る微小地名に着目しながら、この地が育ててきた人と自然の「物語」について論じてみたい。

1. 襟裳岬の微小地名

海につけられた地名がある。「地名は海中・海底の有りようを脳裏に引き上げる釣り針のようなもの」(松本 2003 : 315) で、「地名を手がかりとした動態的なイメージのふくらみ」(松本 2003 : 321) を持っている。陸の微小地名が失われつつある民俗になっているように、海の微小地名も各地で忘れられつつある。

だが、日高山脈が断崖となって太平洋に沈み込む襟裳岬には、漁業を主体とする人びとだけでなく、

「よそ者」^③にも共有され、現実に利用されている微小地名がある。襟裳岬の岩礁地帯は、陸ではなく海の領分にある。襟裳岬から約2キロメートルに渡って続く岩礁地帯には、ローソク岩(ろうそくの形の岩)、ポロイソ(ポロポロと崩れる磯)^④、ナガイソ(長く横たわっている磯)など、それぞれに名前がる。漁船が通る水路もオキノクキド(沖の水路)、ナカノクキド(中の水路)、オカノクキド(陸側の水路)などと名づけられている。こうした微小地名が、岩礁地帯に生息するゼニガタアザランのセンサス調査(個体数調査)のなかで、用いられているのである。

では、この微小地名の利用は何を意味しているのだろうか。少し遠回りになるが、えりも岬の人と自然の関係性を紐解きながら論じていこう^⑤。

2. えりも岬の人びとと緑化事業

えりも岬の沿岸ではサケ・マスの定置網漁業が営まれている。「襟裳漁田」と言われた豊かな漁場からは、タコ、スケトウダラ、カレイ、ハタハタ、シシヤモなど多種多様な魚種が水揚げされる。マツブなどの貝類やマツモなどの海藻類もとれる。

しかし、なんと言っても主力は昆布漁である。昆布漁を営む人は、自らを「漁師」ではなく「昆布漁師」と呼ぶ。採取される昆布(三石昆布)は「日高昆布」の名で流通しており^⑥、「利尻昆布」「羅臼昆布」といった他の北海道の代表的な昆布と比べても格段に知名度が高い。えりも町漁業協同組合が扱う昆布は品質が良い高級品を主力としており、地元ブランドとして「えりも岬産昆布」を売り出している。えりも漁業協同組合HPの「直産市場」^⑦では、「えりも岬産昆布」について「緑化事業で蘇ったえりも岬の海の恵みをいっぱい吸収して、美味しい昆布に育つ」と説明する。えりも岬の昆布と豊かな漁場は、「緑化事業で蘇った」結果なのである。

えりも岬には強風が吹く。明治時代に開拓者の斧

が入り、森林が燃料のために伐採された。土地が切り開かれ、放牧地となるにつれ、強風は森林だけでなく草地も後退させた。赤土の吹き荒れる「えりも砂漠」が出現し、飛砂は沿岸海域をも荒廃させた。昆布の等級は落ち、沿岸の水産資源も減少した。影響は漁業不振にとどまらなかった。飛砂は目の疾患を引き起こした。家の中にまで入り込む砂を避けて、ちゃぶ台の下で食事をする人もあったという。飛砂の影響は、後継者不足の問題など、えりも岬の生活全般に及んでいた。

この地で本格的な緑化作業が開始されるのは、1953年の「えりも治山事業所」（浦河営林署）開設後である^⑧。漁師が緑化作業を担う形で行われた治山事業は、当初は強風に阻まれて成果があがらなかった。だが、雑海草で作物を被覆するとうまく生育するという在地の知をヒントに「えりも式緑化工法」が生まれてからは、作業は飛躍的に進んだ。

在地の知とは、人びとが日常の暮らしの中で時間をかけて育んできた、自然に対する知識である。科学的な知識とは異なり、普遍性や一般性を持たないが、局所的な自然の微細を経験的に読み解き、柔軟に問題に対処しうる力を持っている^⑨。この力が緑化事業の成功を導き、緑の森が海を再生した。そして海の再生は、魚介類水揚げ高の飛躍的な上昇という目にみえる形で示された。

だからこそ、緑化事業は作業を担った人びとへの敬意をもって語られてきた。NHKの「プロジェクトX」が緑化事業を地域の人びとの偉業として伝えたように（プロジェクトX制作班編2001）、ローカルな問題解決能力が評価されたのである。

おそらく、緑化事業に対する称賛は、えりも町にとっても、事業を担ってきた当事者にとっても、思いがけない驚きだったに違いない。というのも、長い年月をかけて進められた緑化作業は、同じように長い間、さほど社会の関心を引いてこなかったからである。えりも岬には、かつてであれば昆布漁と出

稼ぎ、現在であれば昆布漁とサケ・マス定置網漁というように、昆布漁とその他の仕事を組み合わせた生計戦略があった。緑化作業もその他の仕事のひとつであり、暮らしの一部だったはずだ。緑化事業への賞賛は、その意味で、人びとの日常への賞賛でもあった。

3 ゼニガタアザラシとの共生

ゼニガタアザラシとの共生も、えりも岬の日常の暮らしから立ち現われてきた「物語」である。もともと、えりも岬の人びとにとって、ゼニガタアザラシは珍しい動物ではなかった。岩礁地帯にはトドやオットセイが姿を見せていたし、地元で「トッカー」と呼ばれるゼニガタアザラシは、えりも岬の人びとに「共食」の楽しみを提供していた。もっぱら商売を目的とした猟ではなかったが、時には小遣い稼ぎにもなったようである。

「アザラシの肉は今の季節（二月頃）が一番おいしいんです。一度に4～5頭捕まえたこともあります。味噌鍋にしてね。大きな鍋にこさえて、近所に『こい！』って、声かけるんです。集まってくると『こんな大きな鍋にこさえて、誰が食べるの〜』と言いながらみんな三平鍋に3杯も4杯も食べて、鍋はいつも空になりました。」（えりも町教育委員会2007：96）

「アザラシは昭和50年くらいまで食べていたかな。トドの肉と一緒に、結構やわくて食べられる。…佃煮とかにして食べた。皮は山スキーの裏に貼ると、滑り止めになったという話だ。どっかに売ったという話も聞いたな。」⁽¹⁰⁾

ゼニガタアザラシが身近であったことは、微小地名からも読み取ることができる。シノビ岩はアザラシ猟の際に身を隠す岩を、トッカークキドは絶えず

トツカリが通っている水路を意味する。こうした地名から、海を見詰め、潮を読み、ゼニガタアザラシを身近に暮らしてきた人びとの姿が浮かび上がる。

他方で、ゼニガタアザラシは北海道全体でみると、必ずしも身近ではなくなっていた。1973年、北海道で調査を行っていた哺乳類グループ海獣談話会が、ゼニガタアザラシの生息数の減少を指摘した。複数の生息地でゼニガタアザラシのセンサス調査が行われ、「ゼニガタアザラシを天然記念物に」という動きも出てきた。だが、天然記念物に指定されると、従来の捕獲・利用という行為が途切れてしまうばかりか、個体数が増加して漁業被害が深刻になりかねない。えりも岬の漁師たちは、一方的にゼニガタアザラシを保護する見解に不満を持ち、反発した。

この緊張関係を解きほぐす糸になったのが、えりも岬の漁師たちとゼニガタアザラシのセンサス調査をしていた学生調査員との交流であった。強風の襟裳岬にテントを張っての調査を見るに見かねて、漁師たちは昆布小屋に学生たちを招き入れた。宿を提供し、時には酒を振る舞い、共に語った。

そうした漁師たちとの関係が、外部からの一面的な「保護」の視点を、漁業被害をも含めたゼニガタアザラシとの「共生」を考える視点へと変化させた。1982年に帯広畜産大学の学生らによるゼニガタアザラシ研究グループ（「ゼニ研」と略称）の結成は、保護から共生への路線転換を記すものだった。ゼニ研は、漁業被害を含めてゼニガタアザラシの保護を考え、ゼニガタアザラシの観光資源利用を模索してウォッチングツアーを企画した⁽¹¹⁾。「ゼニ研」結成前後の数人の学生が卒業後にえりも町の住民になり、1990年、被害を受けるサケ・マス定置網漁師や観光業者らと、「えりもシールクラブ」（「シールクラブ」と略称）を結成した。ゼニガタアザラシとの共生を考える会の誕生である。

襟裳岬でのセンサス調査は、他の生息地とは異なり、個体に近づいての調査が困難だった。そのため、

「アザラシが見たい」という動機で調査に加わる学生たちには魅力に欠けるところもあったという。だが、人とゼニガタアザラシとの関係を考えるという文脈でいえば、この地は最も魅力的であったろう。実際、自然との共生という理念や思想が浸透するなかで、シールクラブは共生を具体的に考えるための先進的な試みとして注目を浴びていくのだから。

4. 人とアザラシと共有された微小地名

ゼニ研は、緑化事業がそうであったように、えりも岬の在地の知に学んでいる。微小地名のセンサス調査利用である。微小地名は昆布漁や海草採集になくてはならない知識だ。昆布漁師は海底の岩のかたち、岩盤の性質、昆布の生え方、そして風向きと波を考えて採取の場所を決める。微小地名には、そうした微細な情報が組み込まれている⁽¹²⁾。

よそから昆布漁師の家に嫁いだ人も、海草採取をしながら地名を覚えた。岩礁地帯では、フノリやギンナンソウ、マツモやイワノリの採集が行われる⁽¹³⁾。漁船に乗って採取採集地点にあがるときに、「あっち上がれ、こっち上がれ」と指示されるので、「自然に覚えた」という。「海草とりの人は岩の名前を知っている」のである⁽¹⁴⁾。

えりも岬の漁師は、しばしば「岩には名前がついている」と語る。岩の名前が「よそ者」の興味・関心をひく情報であり、岩の名前というローカルな知がローカルを超えた意味を持つことに漁師たちは気づいている。襟裳岬で民宿を営む若主人は、昆布漁師でもあり、えりもシールクラブのメンバーでもある。民宿の食堂にはゼニガタアザラシが生息する岩礁を向いて望遠鏡が据え付けられている。若主人は、「岩には名前がついている」と語り、詳しいことは「ゼニ研が知っている」と教えてくれた⁽¹⁵⁾。

以下に掲げる図はゼニ研がセンサス調査に用いている資料である。襟裳岬から写した写真をつなぎあわせてトレースした図に、地元の漁師たちとの交流

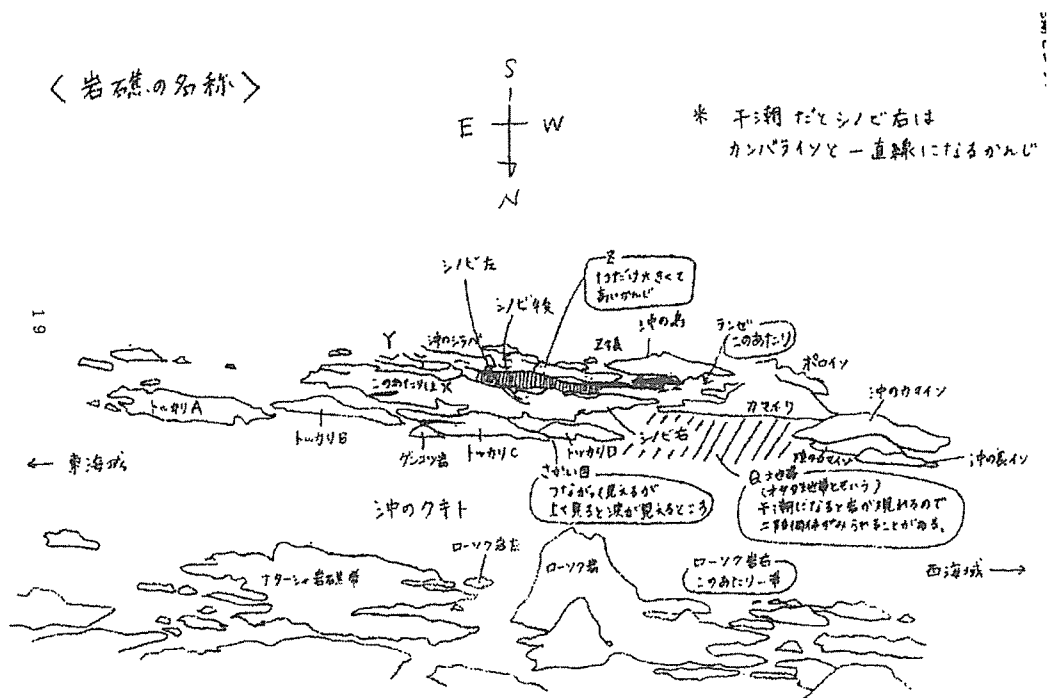
のなかで学んだ微小地名が記載されている。センサス調査のなかで、漁師たちのローカルな知が取り込まれているのだ。えりも岬の在地の知である微小地名は、ゼニ研の科学的ないし生態学的知識と結びついてきた。この図は、ゼニ研が地元の漁師たちとの交流を重ね、ゼニガタアザラシとの共生をともに考えるにいたった、その関係性を象徴するものに他ならないのだ。

えりも岬の漁師たちは、漁師がサケを捕るのが自然なら、ゼニガタアザラシがサケを食べるのも自然だと語る。豊かな海だからこそゼニガタアザラシがいると語る。ゼニガタアザラシに惹きつけられて訪れる人びともまた、「野生生物との共生とは何か」を、漁師たちの目線と考えようとする。

振り返ってみると、四囲を海に囲まれたこの国で、高度経済成長の時期に海の汚染を警告する先鋒とな

ったのは漁師たちであった。森を育てることで、磯焼けの海に豊かさ（生物多様性）を取り戻し、魚付く海を育ててきたのも漁師たちだった。加えて、えりも岬では、海の豊かさ（生物多様性）を象徴すると同時に、漁業にとっては敵対的にみえる野生生物との折り合いの付け方を漁師たちは考えてきた。

自然環境の問題が「開発か保護か」、「生活か自然か」といった二項対立で語られていた時期はすぎた。いまや自然環境の保全や自然再生、自然との共生を、科学的な生態学的知識のみならず、当該社会のローカルな知や日常の実践（田辺・松田編 2002）を重視して構想しようという時代になっている。それを先取りするかのように、えりも岬の微小地名は、ローカルな知を越える新しい機能と役割を持つに至っている。微小地名は、「生きられる民俗」として、沿岸域の自然との共生を考える羅針盤になっているのだ。



ゼニ研のセンサス調査使用図

出典：ゼニガタアザラシ研究グループ（2008：19）

【注】

- (1)以下、字えりも岬の集落を示すときは「えりも岬」、観光名所になっている日高山脈南端の岬を示すときは「襟裳岬」と表記する。
- (2)2008年度科研費基盤研究(A)(代表・宮内泰介)(<http://miya.let.hokudai.ac.jp/ada/>)の共同研究。本稿もこの研究成果であり、かつまた2007-08年度科研費基盤研究(C)「自然環境を媒介とした共同性構築に関する研究—人と自然の関係誌を読み解く—」(代表・関礼子)の研究成果の一部である。
- (3)ここでの「よそ者」とは、「今日来て明日去っていく人ではない。むしろ今日来て明日とどまる人」(ジンメル1999:248)という意味である。鬼頭秀一(1996)は、「よそ者」が外部の視点を持って地域にかかわりあう重要な存在であることを明らかにした。「よそ者」とは、一般に用いられるように、コミュニティの内と外をわける概念ではない。他所からやってきてそこに属している者、そこに属していたが他所に出て新たな視点(=「よそ者」の視点)を獲得して戻ってきた者などが地域にもたらす、多角的なものの見方、考え方などを意味する概念である。
- (4)2008年8月3日のSK氏からの聞き取りによる。地名の語源と異なるが、ここではインフォーマントの解釈を重視した。
- (5)以下、緑化事業とアザラシの問題については、関(2000)で概略を記した。
- (6)昆布は厳しく7等級に区分されており、等級によって値段が大きく異なる。
- (7)えりも漁業協同組合は販売店舗を持たず、HP(<http://www.jferimo.or.jp/shop/shop.html>)での直販事業を行っている。
- (8)既に明治20年頃から、「将来必ず用材薪炭の不足を生じ…重要な海産を発達せしむる能はざるに至りなば将来の不覚、如何にしても植林愛林の思想を起こさしむるの急務」として、植林が試みられていた(渡辺編1971:874)。
- (9)在地の知は、「自然知」(篠原1995)、「TEK(Traditional Ecological Knowledge)=伝統的な生態学的知識」(大村2003)など、近代的な科学的知識の問題と限界を超克するヒントとして注目されている。
- (10)2008年8月2日、SI氏からの聞き取りによる。
- (11)ツアーは10回で休止となった。この経緯と課題は、石川(2002)に記されている。
- (12)2009年1月11日のSK氏からの聞き取りによる。
- (13)これら海草採取は生計をたてるに重要な時期もあったが、現在は採集量が少なく、ほとんどは自家消費用になっているという。

- (14)2008年8月3日のSK氏の配偶者からの聞き取りによる。
- (15)2008年8月4日の民宿Mでの聞き取りによる。

【参考文献】

- 石川朋子2002「アザラシウォッチングツアーの12年」『Front』9月号:23-25.
- えりも町教育委員会編集監修2007『潮風とともに—えりも昔語り記録集』えりも昔語りを記録する会.
- 大村敬一2003「近代科学に抗する科学—イヌイトの伝統的な生態学的知識にみる差異の構築と再生産」『社会人類学年報』Vol.29:27-58.
- 鬼頭秀一1996『自然保護を問い直す—環境倫理とネットワーク』ちくま新書.
- 篠原徹1995『海と山の民俗自然誌』吉川弘文館.
- ジンメル,G、北川東子編訳・鈴木直訳1999『ジンメル・コレクション』ちくま学芸文庫.
- 関礼子2000「共生を模索する環境ボランティア—襟裳岬の自然に生きる地域住民—」鳥越皓之編『環境ボランティア・NPOの社会学(シリーズ環境社会学1)』新曜社.
- ゼニガタアザラシ研究グループ2008「2008繁殖期センサス」(資料).
- 田辺繁治・松田素二編2002『日常の実線のエスノグラフィー—語り、コミュニティ、アイデンティティ』世界思想社.
- 松本博之2003「先住民の海洋資源利用と国民国家の管理—オーストラリア・トレス海峡諸島民のジュゴン鯨を事例として」岸上伸啓編『海洋資源の利用と管理に関する人類学的研究(国立民族学博物館調査報告46)』:299-343.
- プロジェクトX制作班編2001『プロジェクトX挑戦者たち7 未来への総力戦』日本放送出版協会.
- 渡辺茂編1971『えりも町史』えりも町.

謝辞

調査にご協力いただき、貴重なお話をうかがわせてくださったえりも町の皆様に心よりお礼申し上げます。また、本稿執筆の機会と適切なコメントをくださった中岡利泰氏に感謝いたします。